THE CHINA CARD

John Ehrlichman

チャイナ・カード

John Ehrlichman

THE CHINA CARD

ジョン・アーリックマン

新庄哲夫・高沢
角川書店

上

江苏工业学院图书馆
藏书章

チャイナ・カード　（上）

ジョン・アーリックマン

1990年9月30日　初版発行

訳　者　新庄哲夫

発行者　角川春樹

発行所　株式会社 角川書店

東京都千代田区富士見2-13-3

電話（営業）03—817—8521
（編集）03—817—8451

〒102　振替　東京3-195208

印刷所　旭印刷株式会社

製本所　株式会社鈴木製本所

装丁者　渋川育由

落丁・乱丁本はお取替えいたします

© Printed in Japan

ISBN4-04-791182-8　C0379

チャイナ・カード（上）

THE CHINA CARD

by

John Ehrlichman

Copyright © 1986 by John Ehrlichman
Japanese translation rights arranged with
Simon & Schuster, Inc., through
Japan UNI Agency, Inc.

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

セオリー

僕を取り巻いているものこそ僕なのだ。
女たちはこのことをよく心得えている。
公爵夫人なんかじゃないのだ
馬車から百ヤードも離れていれば。

それら、たとえば肖像画なのだ、
黒い玄関の間も、
カーテンを降ろした高脚ベッドも。

これら、ほんの数例にすぎないのだ。

――ウォーレス・スティーヴンズ
『全詩詩集』（一九五四年）から――

作者の言葉

この物語は事実を土台にしている。たとえば中国の文化大革命と米中国交回復は、作中に描かれる重要な出来事である。こうした出来事や、それに関与した合衆国と中国の指導者、政府高官たち、さらに政治的状況などが大体において、この架空ドラマが演じられるのに先立つ現実の背景となっている。しかし、これはあくまで小説である――こうした出来事の間に、マシュー・トンプソンとその身の上に起こった物語なのだ。マシュー・トンプソンは架空の人物である。したがって、彼が交わす実在人物――たとえばリチャード・ニクソン、周恩来、ヘンリー・キッシンジャーら――との会話はまったくの虚構にすぎない。マシュー・トンプソンの身の上に振りかかった運命も作り事である。実在人物がトンプソンに、あるいはトンプソンについて述べた言葉、トンプソンに対して、あるいはトンプソンをめぐって行なったり、行なおうとした行為は、むろん私の想像の産物である。グレナ・ハリソンやマットの友人たち、恋人たち、その家族も架空の存在である。物語の結末やそれに関連した出来事も、またヘンリー・キッシンジャー、アレグザンダー・ヘイグ、周恩来、リチャード・ニクソンら実在人物の会話、思考、行動と同じく（広く知られた歴史上の行動を除いて）私が考え出したものである。これら虚構の会話、思考、行動は、小説の雰囲気やプロットを作るために必要だった想像上の産物である。

チャイナ・カード（上）主要登場人物

マシュー・トンプソン……ウォール街の新進弁護士
リチャード・ニクソン……次期大統領候補
ローズ・メアリー・ウッズ……ニクソンの大物秘書
ロン・ダミコ……詐欺師、マシューの依頼人
メアリー・フィン……連邦検事補
鄧善礼……元中国外務省高官
楊徳重……周恩来の秘書兼ボディーガード
周恩来……中華人民共和国総理
王麗花……周恩来の秘書兼通訳
洪偉浪……香港の大実業家、海運業者
グレナ・ハリソン……マシューの恋人、富豪令嬢
エズラ・トンプソン……マシューの父
H・R・ホールドマン……ニクソン・スタッフの最高責任者
ジョン・N・ミッチェル……ニクソンの選挙対策本部長
アンジー・クルーズ……トンプソンの秘書
ヘンリー・キッシンジャー……政治学者、国家安全保障問題担当補佐官
ウィリアム・ロジャーズ……国務長官
アレグザンダー・ヘイグ大佐……キッシンジャーのスタッフ

プロローグ

ホワイトハウス
一九七四年　秋

「われわれは非常によいこともやったんだ、ヘンリー。そのことを世間は覚えていてくれるだろうか」
「もちろん、覚えていてくれますとも、大統領閣下。歴史的な視点から見れば、閣下は、困難な時代から国家を救った強い大統領ということになりましょう」
「どうかな。世間は、大統領の一番悪いところだけを覚えておるのじゃないか。第一次大戦後のウィルソンにした仕打ちを見てみろ。歴史家どもは、この私をハーディングやグラントと一緒くたにして片付けるのじゃないか。そうは思わんかね？」
「とんでもない、閣下、ＳＡＬＴ（戦略核兵器制限交渉）や中国、それにベトナム戦争の名誉ある終結があります。そんな功績が看過されるはずはありません」
「君の言うとおりかもしれないね、ヘンリー。中国との国交回復となれば、われわれとは切り離せない大事業だからな。達成したのはわれわれだ。そうじゃないか。今後、世界は変わる。なにせ合衆国大統領が手の中にチャイナ・カードを握ってるんだからな。その点で、われわれは感謝されてしかるべきだ

な、ヘンリー」

国務長官ヘンリー・キッシンジャーは、ゆっくりとうなずいてみせた。ホワイトハウスが頭上で崩壊しようとしている今、歴史の最終的な審判を思いあぐんでも詮ないことだ、とキッシンジャーは思った。

「歴史の大部分は、われわれが作ることになるでしょう、大統領閣下」とキッシンジャーは答えた。「閣下が書く。私も書きます。同僚たちも書くでしょう。歴史家の目を存分に導くことができますよ」

「そうだろうな」とニクソン大統領。「友人たちが間違いなく、真っ先に筆をとれるように按配しなくちゃならん。しかし、それ以外の者をどうするか。トンプソンについてはどうしたらいい？」

「手の打ちようがないでしょう、大統領閣下、われわれがとった処置以上のことは。トンプソンはもういませんし。どこにいようが、きゃつは中国を恐れてるに違いありませんよ。きゃつが本を書くとは考えられませんね」

「そりゃいい。米中国交回復のやり方について、歴史家たちを大いに惑わせるのがトンプソンのような輩なのだ」

「そうですとも、大統領閣下。きゃつならやりかねません」ヘンリー・キッシンジャーはあっさり同意した。「実際、その可能性もないわけじゃありませんが。しかし、その危険性は少ないと思いますよ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一部

第一章

一九六六年　秋

「これに」――と若い女性が指差した――「細大漏らさずに記入してください、トンプソンさん。すべての空欄にですよ。そしてなるべく丁寧に書くこと。そうすれば、読みやすいでしょう。あなたの履歴書は、人事資料の一部として永久に保存されることになります。そのことをお忘れなく」

ミス・ジャミソンに好意を持つ者が本当にいるのだろうか、とマシュー（マット）・トンプソンは思った。きっと法律事務所の共同経営者には魅力たっぷりに振る舞い、秘書とか若い弁護士と話すときにだけ本性をまるだしにするのだろう。

トンプソンはうなずいた。小部屋の照明は暗かった。ミス・ジャミソンは自分で持参した書類をのぞきこんでいた。

「この欄だけど、記入してもしなくても、わたしはどうでもいいのよ」スーザン・ジャミソンはこばかにしたように言った。「ここにはスポーツ・チームがあるんだから、どんなスポーツをしてるのか知りたがる人もいるのよ。わたしは関心ないけれど」

トンプソンはほほ笑んだ。「去年の夏、ここへ研修にやって来たときには、ソフトボールをやりまし

た。あまり上手じゃありませんでしたがね」

ミス・ジャミソンは努めて無関心を装おうとしていた。「あなたが二時半にマーフィさんと面談するまでに、わたしのオフィスは、この書類がどうしても必要なの」と彼女はかぶせた。「あなたが配属されるのは……」彼女は書類ホルダーの表紙にある名前を探して、「あなたはエルドン・カーナヘイのもとに配属されます。エルドンをご存じ？　必要なときにはエルドンが力を貸してくれます」

「僕が研修に来たとき、カーナヘイさんはいませんでした」マット・トンプソンは答えた。「カーナヘイさんはこのフロアーにいらっしゃるんですか」

「二四〇七号室、突き当たりの部屋よ」ミス・ジャミソンはその方向を指差した。「わたしの秘書はミス・コーエン。二〇一九号室です。二時半までにこの書類をかならず書き上げてくださいな、トンプソンさん」スーザン・ジャミソンは、スチール・デスクの上でまず書類を横にし、ついで縦にしてとんとんと揃えた。書類ホルダーにきちんと綴じると、トンプソンの真ん前に置いてすっと立ち上がり、挨拶がわりにそっけなく顎をしゃくった。トンプソンは立ち上がったほうがいいのかどうかわからなかった。レディーは弁護士でもなければ、ましてや共同経営者でもなかった。が、新入りの若い弁護士にとって、どこを向いてもボスだらけ、ひょっとしてミス・ジャミソンもボスの一人かもしれないのだ。トンプソンはさっと腰を上げた。

夏にニクソン・マッジ・ローズ・ガスリー・アンド・アレグザンダー法律事務所に来たときのボスも、共同経営者の一人ではなかった。ミルトン・ツァーシスも上級職員にすぎなかったが、二十年近くも事務所に勤めており、研修監督官であった。共同経営者には絶対になれないだろうともっぱらの噂だったが、理由は誰も知らないらしかった。しかし、噂の主はまるでそれを苦にしていないように振る舞った。マット・トンプソンはいつもミスター・ツァーシスの側に立ったが、それも彼が年長者であり、敬意を払っていたからだった。マットはミス・ジャミソンには敬意を払う気になれなかった。

仕上げた書類を二〇一九号室の腰が低いミス・コーエンに届けてもどってくると、マットは、小部屋の補助椅子に、背の高い赤毛の見知らぬ男がコートと帽子を膝の上に置いて前かがみになっているのを見つけた。

「トンプソンかい？　私はカーナヘイだ」座ったまま手を差しのべて、赤毛の男が言った。「私も、しばらくはこの穴蔵にいたことがあるが、こんなに暗かったとはすっかり忘れてたよ。ちょっと昼飯でも食べに出ないか。もう雪はやんだそうだ」

マンハッタンの金融街は、狭い通りで昼食時の人波が押し合いへし合いしており、溶けかかった雪が靴やズボンの裾を濡らした。カーナヘイは、ブロード・ストリート二十番地の角を曲がったところにある小さなサンドイッチ店にマットを案内した。注文を待っている間に、カーナヘイは天候のことで悪態をつき、紙ナプキンでズボンの裾をふいた。

「君にもいずれわかるが、アル・マーフィーは見てくれをひどく気にする男だ」カーナヘイは忠告した。「きょうの午後、君を引き合わせる予定だが、もし私に何か手落ちがあれば、マーフィーは君への見せしめに私を叱りつけるだろう。ズボンの裾が濡れてるだけでやつには充分なんだ」

「マーフィーさんって、一緒に働きづらい方ですか」マットが尋ねた。

「若くて堅物だ」カーナヘイが笑みを浮かべた。「ぺしゃんこに押しつぶされたせいで、ユーモアのセンスを失くしてしまったのさ。でも、悪い男じゃないよ。多国籍企業を十社くらい扱ってるから、ニューヨークにいるのと同じくらい、ロンドンやパリにも滞在する。それぞれのオフィスで五、六人の下級職員をこき使ってるよ。事務所にとっちゃまさに本物のマネー・メーカーだ。配属されるには、お誂え向きのチームだな」

「どういう人たちが入ってるんです？」

「ああ」――カーナヘイは笑いながら――「ビッグ・ツーさ。ガスリーとアレグザンダーだ。研修に来

たとき、でっかい写真を見なかったかい？」
「夏の間じゅう、リドリーのもとで遺言の検認訴訟をやってたんです。あまり人には会いませんでした」
「ガスリーにもアレグザンダーにも会ってないはずだ」カーナヘイはにやりとした。「連中は、下級職員ともあまり口をきかない。研修員など論外だ。おっと、注文をすませたほうがいいな。マーフィーとの会見に遅れてしまうぞ」
壁を背にして立ち食いしながら、カーナヘイはニクソン・マッジ法律事務所の主立った共同経営者についてざっと説明した。「レン・ガーメントは訴訟部門の担当だが、お人よしすぎて持ちこたえられないだろう。ジョン・ミッチェルは新入りだ。自分の事務所を買収されたのさ。ミッチェルがやってるのは債券関係だけ――どういうことだか知ってるかい？」
「ほとんど知りません」マットは認めた。「大学の法科で習ったことくらいです」
「市や州が公債を売って借金する際、大手の証券会社は、その手続きが完全で債券が有効かどうか、弁護士の意見を求める。だから、ミッチェルは、手続きに穴をみつける以外何もしない若者の一団をかかえてるだけさ――高速道路建設委員会から適切な通告が出てるかどうかといったような問題さ」
「そんな仕事で事務所は儲かるんですか」
「ああ、もちろん、たんまり儲かるさ！　公債発行高の何パーセントか手数料として頂戴するからな。ミッチェルは、投資銀行や地方政治家と手を結んで、いつも連中を喜ばせる。それがもっぱらやっこさんの仕事だ。ネルソン・ロックフェラーとかニューヨーク政界のボスどもとツーカーの仲さ。弁護士としての腕前はあやしいもんだが――フォーダムかセント・ジョンズかカトリック系の大学を出てるんだよ――別に弁護士である必要はないのさ」
「リドリーはどうです？」

「リドリーのような共同経営者は、四十人近くいるね――馬車馬だな。クライアントをたえずハッピーにさせるような仕事をしてる腕っこきの一流弁護士だ。実際、あそこには、信じようが信じまいが、優秀な弁護士が揃っているんだよ。あっ、そろそろ帰らなくっちゃ。もう二時になるし、君はマーフィーと会う前に靴を磨いておく必要があるし」

雪どけのぬかるみを、ブロード・ストリート二十番地に近づくと、マットは、ハーバード法学大学院の第一学年を終えた一九六四年のむし暑い六月のある日、初めて巨大なビル群を見たときのことを思い出した。ミスター・ツァーシス、カーペンターという若い共同経営者の面接を受けるために呼び出されたのであった。カーペンターとは二度と会うことはなかった。最初の日、二十四階にあるガラス張りの待合室で、受付嬢はえらく親切であった。彼女は、植民地時代の複製シャンデリアが真上にあるデスクに座っていたが、デスクとほぼ同じ大きさの金箔半球の真ん中から、シャンデリアが吊るしてあった。彼がそわそわしているのが、受付嬢にはわかったのだろう。リチャード・ニクソンの秘書の一人がわざわざ出てきて、マットに挨拶した。ツァーシスとの面接を手配したのはニクソンであった。トンプソンの父がニクソンに世話を頼んだからである。

ニクソンのような人物が父親を覚えていたことに、マットは驚いたが、なんせホイッティア大学は小さなカレッジであった。ニクソンは教わった先生を一人残らず覚えているのだろうか、とマットはいぶかった。ツァーシス、カーペンターとの面接はすこぶるうまくいき、ほとんどその場で、大学の第二学年を終了したら、ニクソン・マッジ法律事務所で研修するよう求められたのであった。

マットは好感を持たれた。リドリーはその下で働きやすい人物だったし、第三学年の成績もよかったので、ハーバード大学を卒業する頃には問題なく入所が決まった。ニューヨーク州の司法試験は予想されたほど難しくはなかった。そしていまや、マット・トンプソンは最初の仕事を言い渡されようとしている正規の資格を持つ、宣誓もすませた弁護士――しかもウォール街の弁護士となっていったのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com